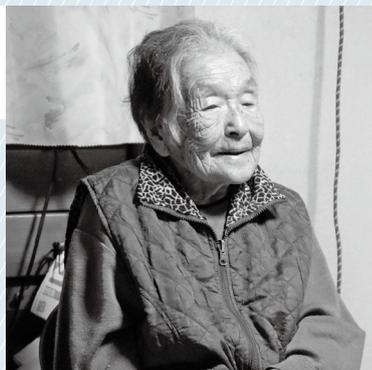


## それぞれの戦争 ～後藤信子さん～



今年は戦後81年を迎えます。かつての戦争は、遠い過去の出来事のように思われがちです。しかし、その影には一人ひとりの忘れ得ぬ体験が刻まれています。

私たちの町にも、戦禍をくぐり抜けた方々が今も暮らしており、その語りは貴重な歴史の証言です。これらの証言が戦争の現実と平和の尊さを次世代に伝える一助となることを願っています。

戦争が激しさを増す中、青春時代に学び、働き、空襲を体験した後藤信子さん。女学校時代の体験や空襲の記憶、そして次の世代へ伝えたい思いを紹介します。

後藤信子さんは昭和二（一九二七）年六月、九重町平家山に生まれました。小学校時代は堀田分教場（現在の野矢小学校）で学び、友人とよく遊ぶ子どもでした。昭和十二（一九三七）年に日中戦争が始まり、後藤さんが森高等女学校へ入学する昭和十四（一九三九）年頃には、入学試験から筆記試験が無くなり、身体検査と口頭試験のみとなりました。学力よりも健康であることが優先されるようになったためです。

学校の授業は、勤労と鍛錬が中心となりました。後藤さんが特に記憶に残っていると語るのが、奈多の浜で一週間にわたる海水浴の訓練です。また、三泊四日で志高湖での飯盒炊飯の訓練と別府・ラクテンチまで徒歩での往復、三泊四日の久住登山、修学旅行での大分海軍航空隊の見学などです。昭和十六（一九四二）年に太平洋戦争が始まったこともあり、学校行事は次第に軍事色を強めていきました。

また週に一度、全校生徒で女子畑まで速足での行進が行われました。さらに、後藤さんが「最もひどかった」と話すのは、学校から深耶馬溪を通り、耶馬溪、中津市を経由し吉富町（福岡県）まで徒歩で往復したことでした。学校に帰り着くのは夕暮れ時で、あまりの辛さに「もう死にたいと思った」そうです。

昭和十八（一九四三）年からは竹槍訓練、バケツリレ

ーの防火訓練が行われるようになりました。「防火訓練は役に立つけれど、竹槍で一体どうしようというのでしょうね」と後藤さんは話します。

昭和十八年三月、女学校の卒業と同時に後藤さんは挺身隊に任命され、軍需工場で働くことになりました。鉢巻と腕章をつけて、出征兵士の様に日の丸の小旗を持った人々に見送られました。

配属先の大分市の鐵工所は、航空機の部品を製造する工場でした。工場には、森高女からの三〇名のほか、別府中学（男子）、第一高女、岩田高女などから集まった若者が大勢いました。

毎朝三〇名で春日神社に参拝し、武運長久を祈った後、それぞれ王子町、生石、金谷迫の工場へ足並みを揃えて通勤していました。当時の日給は一円十銭。公休日は毎月十日と二十六日の月二日でした。「休日には映画に行ったり、古本屋で古書を借りて読んだりするのが楽しみでした。筆で日記を書き、友だちと交換して読み合うといったこともしていました。何か不足を感じることもなく、これが青春でした」後藤さんはそう振り返ります。

食料は乾燥ごぼうや小麦等の混ざったご飯が中心でした。「寮母さんが寮舎の周りに南瓜を植え、その軸や葉を漬して少しでも多く食料を確保する工夫をしてくださいました。おかげで体重が減ることはありませんでした」

戦況の激化に伴い、寮舎では空襲に備え、廊下で寝るようになりました。頭巾を枕にし、靴を履いたまま、友だちと手を繋いで横になり、夜間の空襲時には生石の小さい丘の横穴へしばしば避難していました。

「ある時、空襲警報もなく米軍のグラマン二機が低空飛行でやってきて寮舎の二階を機銃掃射してきました。操縦している兵士の後ろ姿がはっきりと見えたのを覚えています。死者はいませんでした。怖かったです。その頃から毎日のようにB29が編隊で飛来し、爆弾を投下していきましました。弾の傾きを見て『大丈夫』や、『危ない』などと判断していました。日本軍が高射砲で対抗するのですが、全く相手になっていない状況を見て、みじめで悲しくなりました」

昭和二〇（一九四五）年七月、焼夷弾による空襲で、大分市中島なかしまの工場地帯や主要施設は火の海となりました。「どこをどう避難したのかは覚えていません。燃え上がる炎の中に、お寺の屋根がはつきりと見えていたことが印象的でした。毎朝参拝していた春日神社や王子神社の鳥居が倒されているのを見て、日本国民の心が潰されたように感じました」

八月十五日、盆休みで帰省中だった後藤さんは、重大放送があると知り、知人宅へラジオを聞きに行きました。それは、玉音放送でした。「耐えがたきを耐え、忍び難きを忍び・・・」の放送を聞き、集まった人々は、その場にひれ伏して号泣し、誰も言葉を交わすことなく帰っていきましました。後藤さんもただ呆然とするばかりだったといいます。「ショックでした。いつかは戦争に勝つと思っていましたから。ただ、今思えばそう教育され、思い込まされていたのでしょね」これで戦争は終わりました。

後藤さんは一度工場に戻りましたが、一時金を支給され、故郷へ帰ることになりました。

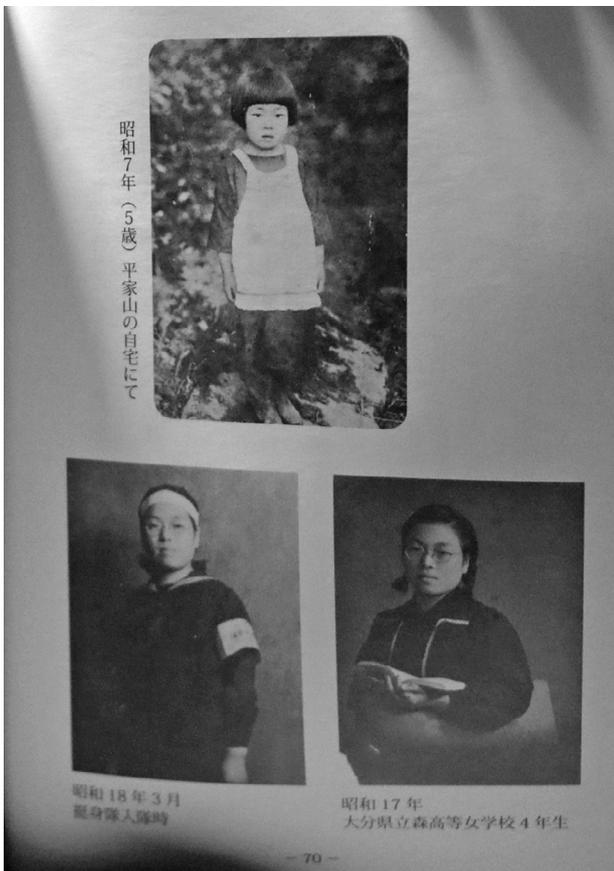
後藤さんに若い世代へ伝えたいことを尋ねると、次のように話してくれました。「戦争の話というと、厳しさや苦しさが最初に想像されますが、その時代を一生懸命に生きた人々がいたことを伝えたい。また、戦後日本という国が潰されずに今も存在していること、敗戦からもう一度国を作り上げたことに感謝したい。日本は素晴らしい国だと思います。みんなが思いやりをもってほしいですね」

帰郷した後藤さんは、結婚後「自分の食べるものは自分で作って食べよう」と夫と共に開拓を志し、現在の地、拓郷に入植しました。まったく経験のない中での生活は「原始生活のような日々だった」と当時を振り返ります。主にトマトやキャベツ、梨づくりに励み、生活の基盤を築いていきました。また、洋裁や茶道、華道などの習い事に親しむ中で、短歌と出会い創作を続けてこられました。その中の一句をご紹介します。

戦果いくさばて 一本植ゑては 一万円

美林びりんとなりたる わが郷さとの山

戦後に植えた一本一本の木が林になるほど長い時間が流れました。しかし戦争は遠い昔の出来事ではなく、振り返ればすぐそこにある出来事なのかもしれません。



▲幼少期、挺身隊入隊時の後藤さん